

ふるさと再発見!

vol. 17

ほろほわかやま

FREE

巻頭
特集

紀州の嫁入り

婚礼儀式はにぎやかに

歴史
散策
文化

熊野水軍と熊野別当
真土山の万葉歌碑をめぐる
技術を引き継ぐ者たち。～紀州筆筈～
「未来へつながる道 田辺市」へ

I♥WAKAYAMA 私の和歌山

紀州の

嫁入り

〜 婚礼儀式はにぎやかに〜

春姫の輿入れを再現した「春姫道中」



「ハデ婚」のルーツ？

「ハデ婚」で有名な名古屋の結婚式。そのルーツは、紀州の姫様が尾張に嫁いだ際のきらびやかな嫁入り姿にあると言われている。特に民衆の目を引いたのは絢爛豪華な調度品で、その行列は数キロにも及んだらしい。調度品の一部は時を経た現在、紀州の伝統工芸品として知られるようになった。この「春姫の輿入れ」をはじめとして、紀州にはさまざまな嫁入りのエピソードが残っている。個性的な物語に彩られた紀州の嫁入りの歴史をたどる。



種姫婚礼行列図

豪華絢爛、春姫の嫁入り

紀州藩の初代藩主・浅野幸長の娘である春姫が、尾張藩初代藩主の徳川義直に嫁入りしたのは慶長20年（1615）。大阪夏の陣の直前、戦乱の世の記憶も生々しい時期の輿入れだった。

春姫の嫁入り行列を再現した「春姫道中」を主催している本丸ネットワークは、この

婚礼について「戦国の世も末期となり、春姫は天下泰平のシンボルとして迎えられたのではないでしようか」と分析している。

その花嫁行列は女騎馬武者



紀ノ川を舟で下って嫁入りする様子を再現したジオラマ

43人、長持300棹、御駕籠50挺と伝えられている。これが「ハデ婚」のルーツだという証拠はないが、想像を絶する豪華さだったことは間違いない。

紀州も「ハデ婚」

徳川御三家のひとつ、紀州藩では、春姫に限らず、婚礼に力を入れる文化だったようだ。春姫のように嫁いだけでなく、他藩からの輿入れの記録も残っている。

それによると、嫁入りの際には他藩からの嫁が住む御殿を建てるなど、紀州藩としても万全の受け入れ態勢を整えていたようだ。10代将軍家治の娘・種姫の紀州への嫁入りを題材にした絵巻「種姫婚礼行列図」では、多くの従者を伴った豪華な行列の様子が描かれている。

婚礼で大騒ぎ

では、庶民の嫁入りはどのようなものだったのだろうか。「小梅日記」など、近世から明治期に書かれた日記類には、一家総出で婚礼準備に奔走する様子が見える。また、日ごろから知人との贈答品のやりとりが多いことも目立ち、婚礼の際にもぎやかだったことが想像される。

にぎやかと言えば、荷入れの行列。荷持ちには隣近所の屈強な若者が選ばれ、まず祝いの酒で景気をつけてから、祝い唄を歌い、出発した。道中では、「ゴシヨモ（ご所望）」と声がかかると荷を置き、のど自慢が歌ったという。三三五度にも独特の風習があり、近隣の女房たちが箸を投げつける（かつらぎ町）、白紙に包んだ米つぶてを投げる

（旧川辺町）などが伝わっており、それぞれ花嫁に当たると吉とされた。

独特の婚礼風習

このほか、日前宮、熊野三山、玉津島神社など、由緒正しい神社が多い土地柄から、今でも神前式の割合が多いのも紀州の嫁入りの特徴だ。

祝い物の風習では、かつては近隣への贈り物は紅白の鏡餅が一般的で、そのお返しに梅干し2個が差し出されていたという（旧大塔村など）。今でも梅干しやかまぼこを引き出物に出すことは多く、これも他の地方では見られない紀州独特の文化と言えるだろう。



文学・伝承

紀州の嫁入りは、さまざま
な文学作品や民間伝承の伝説
などで描写されている。そこ
からは、それぞれの時代や地
域の嫁入りの様子をうかがう
ことができる。

紀ノ川

碧く静かな紀ノ川だが、
流れは決して遅い方では
ない。五艘の舟は船頭た
ちのさす棹を待たずに滑
るように水の上を走って
いた。人々がいうように、
両岸には一行を見送る里
人の姿が見られた。人力
車で列を組む嫁入りはも
う珍しくない頃に、舟を
五艘も連ねて、しかも花
嫁御寮は駕籠の中にいる
という時代があった嫁入
りは誰の目を瞞らせるに
も十分だったのだ。
(中略)

小説

綿帽子をとって表座敷
に直ると、男客ばかりの
披露宴は花婿花嫁の前で
盃をあげ、和歌山市の新
地からから呼ばれてきた
芸者たちが胡蝶のように
三十八人の膳のあちこち
を飛び廻り始めた。二
年も待たせた紀本家を、
待った真谷家では祝儀用
の本膳四ツ椀を輪島の椀
与に新しく造らせて今日
の祝宴に備えていた。

◆有吉佐和子「紀ノ川」

華岡青洲の妻

妹背家では盛大な宴を
張って娘を送り出したが、
この地方の習慣に従って
婚家先には家人は誰も従
わない。だから加恵は綿
帽子を冠って見事な花嫁
衣装で平山まで窓をあけ
た駕籠で運ばれると、た
だ一人で家の中に上らな
ければならなかった。

◆有吉佐和子「華岡青洲の妻」

唄



祝い唄

めでためでのこの長持を
いたらきやせん もどりやせん
※長持ちやたんすを棹で担って
行く嫁入り行列で歌われたもの

◆『きのくに民話叢書第二集
紀ノ川の民話』伊都篇』

てまり唄

山ローの絹屋さん
絹屋の娘お菊さん
お菊を嫁にやる時にや
たんす長持一二、三
帯は千すじ二千すじ
着物のえり数かず知れず
それを持たせてやるからに
行たらもどるなお菊さん

◆『きのくに民話叢書第二集
紀ノ川の民話』伊都篇』



縁起

絵巻『宮子姫伝記』



ある日、当時の右大臣・藤原不比等は、鳥の巢から垂れ下がっている七尺余りの黒髪を見つける。この美しい髪はかみなが姫・宮のものだった。不比等は宮を養女として迎え、名を宮子と改めた。宮

子はその美貌と才能を見込まれ、時の帝・文武天皇の妃に選ばれる。さらに、宮子が生んだ皇子は、のちに即位し、聖武天皇となった。

◆ 絵巻『宮子姫伝記』

(要約・口語訳)

※ほうぼうわかやま14号より

俗伝

今はそれほど見なくなったが、以前前田の子どもは結婚式の真似をして月夜の遊戯とした。2人で手を組み傾けて人力車のようにし、1人の女の子にそれぞれの男の子の最も好きな帯紐や簪などを貸して装わせ、嫁として乗せ、多くの子どもも付き添い、手を組んだ2人の子が

嫁を揺らしながら「嫁さま長持いっ来るよ、明日の朝の今頃よ（あり得ないことを言う）、月夜に提灯何事よ、闇夜に提灯もつともじゃ、ギコサとギコサでほーいほい」と繰り返して行く。

◆ 南方熊楠「紀州俗伝」(口語訳)

嫁入り道具

和歌山の伝統工芸品のなかには、嫁入り道具の定番として知られているものも多い。あるいは嫁入り道具として定着するなかで、その技術を展開させてきたと言えるかもしれない。

紀州^{きしゅうたんす}箆筒の起源は定かではないが、江戸時代の日記などには、嫁入り道具として職人につくらせたという記録が残っている。花嫁行列で歌われる俗謡でも「たんす長持」はよく登場する歌詞で、嫁入

り道具として発展してきたことは想像にかたくない。

海南の名産・棕櫚^{しゅろ}ほうきもかつては嫁入り道具の定番だった。20年、30年と長く使える道具に「末永く幸せに」

飾っている家庭は多い。

という思いを込めたのかもしれない。

紀州手まりは、紀州藩の姫様のために女官がつくったのが始まりとされている。「いつまでも丸く美しく納まるように」と、長く嫁入り道具として用いられてきた。現在でも、家のどこかに手まりを飾っている家庭は多い。



紀州箆筒

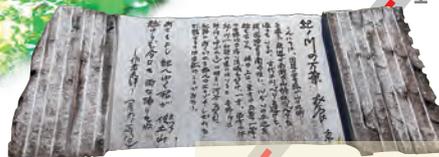
の紀伊国へ

車を

る



真土山
(標高 160m)
全長約 2km の道のり



⑩ 歌碑
あさもよし
紀人羨しも
亦打山
行き来と見らむ
紀人羨しも
調音淡海
(巻二一五五)

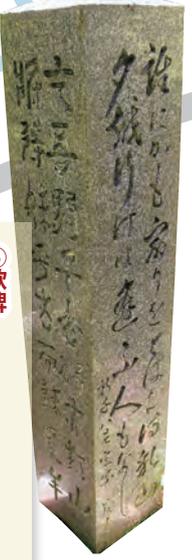
紀伊の国の人はずらやまし
いな。真土山を歩き帰りに
見るといふ紀伊の国の人
はつらやましな。

⑨ 歌碑
あさもよし
紀へゆく君が
信土山
越ゆらむ今日そ
雨な降りそね
作者未詳
(巻九一六八〇)

紀の国へ向かうあなた
が真土山を越えている
だろう。今日こそは、雨
よ降らないであくれ。

⑤ 歌碑
いで吾が駒 早く行きこそ
待つらむ妹を 行きてこそ早見む
作者未詳 (巻二一三三四)

さあ私の馬よ、早くこの真土山を越えて
行っておくれ。きょうと今ごろ私を待つ
ている妻に早く逢いたいから。

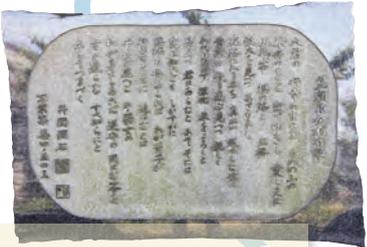


④ 歌碑
椽の 衣解き洗ひ 又打山
もとつ人には なほ知かずけり
作者未詳 (巻二一三〇九)

つるばみで染めて作った着物を解いて洗
い、また打って柔らかくしてくれる。そ
の古着のようによくなじんだ妻にまさ
る女はいない。

③ 歌碑
石上 布留の尊は たわやめの
弓矢かくみて 大君の
みことかしこみ 天さかる
夷へに退る 古衣 又打山ゆ
還り来ぬかも
石上乙麻呂 (巻六一〇一九)

大君の行幸のお伴をして、ほかの多くの
お伴の男と共に出かけに行った私のいと
い夫は、軽の路を通って歌傍山(うねびや
ま)を見ながら紀州への路に入り立ち、今
ごろは真土山を越えているのと思われ、
紅葉の散り飛ぶのを見ながら、私を可愛
い女だとも思わずに、旅は面白いと思て
いるだろうと薄々は知っているけれど、そ
れでもじっとしてはられないので、あな
たの行くに従って追って行くことしきりに
思うけれど、かよいい女の身であるから
役人に質問されてもどう答えたらよいか
分からないし、出かけようとしてはた
めらわれない。

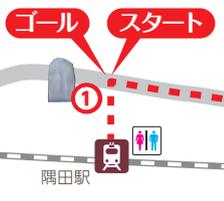
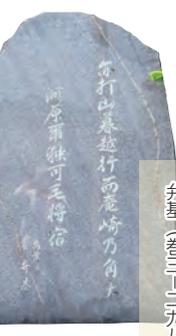


② 歌碑
大君の 行幸のまにま もののふの
八十伴のをと 出でゆきし 愛し夫は
天飛ぶや 軽の路より 玉襪 畝火を見つ
あさもよし 紀路に入り立ち 真土山
越ゆらむ君は 黄葉の 散り飛ぶ見つつ
親しく 我れは思はず 草枕
旅をよろしと 思ひつつ 君はあらむと
あそそには かつは知れども しかすがに
黙然も得あらねば わが背子が
行きのままに 追はむとは 千たび思へど
手弱女の わが身にしあれば 道守の
問はむ答を 言ひ違らむ すべを知らにと
立ちてつまつく 笠朝臣金村 (巻四一五四三)

大君の行幸のお伴をして、ほかの多くの
お伴の男と共に出かけに行った私のいと
い夫は、軽の路を通って歌傍山(うねびや
ま)を見ながら紀州への路に入り立ち、今
ごろは真土山を越えているのと思われ、
紅葉の散り飛ぶのを見ながら、私を可愛
い女だとも思わずに、旅は面白いと思て
いるだろうと薄々は知っているけれど、そ
れでもじっとしてはられないので、あな
たの行くに従って追って行くことしきりに
思うけれど、かよいい女の身であるから
役人に質問されてもどう答えたらよいか
分からないし、出かけようとしてはた
めらわれない。

① 歌碑
亦打山 夕越え行きて 廬前の
隅田河原に ひとりかも寝む
弁基 (巻三二二九八)

真土山を夕方に越えて行くと、
廬前の角太河原にひとり寝
るんだらうな。



いざ、あこがれ 真土山の万葉歌碑めぐ

万葉の都人にとって、海と山の自然美で名高い紀伊国はあこがれの地だった。都を出た旅の一行は、大和国と紀伊国の境の真土山（現橋本市）まで来て、「さあここからいよいよ紀伊国だ」という感慨を新たにしたいに違いない。万葉の都人たちの旅に思いをはせながら、真土山の歌碑をめぐる。

JR隅田駅の前に最初の歌碑①がある。これは紀伊国にきた楽しさよりも、都から遠く離れた寂しさが感じられる歌だ。

駅から東へ線路沿いに歩くと、左手にきつい上り坂。竹やぶにはさまざまな坂を登り切ったところに分岐点

がある。案内板に従い飛び越え石の方へ。

小さな集落と畑を抜ける
と「飛び越え石150m」
の標柱が建っており、その横

に宮廷歌人・笠金村の長歌の歌碑②がある。これは「長旅で浮かれて、きつと私のことなんて忘れてるわね」と男をなじる都の女性の代作だ。万葉時代も女性の気持ちは今とさして変わらないようだ。階段を降りた先には、左手に万葉池。山道をさらに下ると、人妻に手を出して天皇の怒りを買ったとされる石上乙麻呂の歌碑③。

はす池を眺めながら山道を下りきったところに、再び歌碑④がある。



⑥飛び越え石

紀伊国と大和国の境、落合川にあるこの石を飛び越えるように渡ったことが名前の由来とされる。



⑦とびこえ休憩所

古民家を改造したトイレ付休憩所。周辺では、春は菜の花、初夏は蓮の花、夏はヒマワリ、秋はコスモスを楽しむことができる。

これには「真土山」が一種の言葉あそびとして登場している。

あぜ道を抜けると、飛び越え石への道しるべが視界に入る。案内に従い階段を降りたところに建つ歌碑⑤は、真土山が重要な旅のチェックポイントだったことがうかがわれる歌だ。

湿った階段の下には落合川が流れ、そのせせらぎをささむように飛び越え石がある。ここが紀伊国と大和国の境界だ。

もとの道に戻り、古民家を改装したとびこえ休憩所で一休み。

あぜ道を北へ、国道24号を越えて、大和街道沿いに今もなお土壁の住宅が多く残る真土の街並みへ。そこを過ぎればもう奈良県だ。



⑧真土の街並み

大和街道沿いに、昔ながらの土壁の住宅が多く残る。

国道に戻り、西へ下ると、旅に出た夫か恋人を気づかう女性の歌碑⑨。待つ人は祈ることくらいしかできなかった当時の旅がしのばれる。国道をはさんで、天皇の紀伊行幸に従った調淡海という人物の歌碑⑩がある。旅のウキウキ感がにじみ出た歌だ。万葉時代の都と紀伊国の「遠さ」を再認識する。

その横手に、弘法大師ゆかりの井戸がある。高野山草創のころ、水不足に悩む住民のために弘法大師がつくったと伝えられる。干ばつでも枯れたことがないと言われており、今も絶えることなく水をたたえている。もう一度真土山を越えると、駅へ到着だ。



この赤黒は熊野水軍の
闘いに特製した
鎧を忠実に拵つて
したものです

熊野水軍と 熊野別当

熊野水軍のはじまり

紀伊半島南部（元・紀伊国牟婁郡^{むろ}）の地域は「熊野」と呼ばれる。中世の牟婁郡の範囲は現在の和歌山県の西牟婁・東牟婁郡から三重県の南牟婁郡の辺りまでであった。内陸部は山林で覆われて耕作地に乏しく、人々は生きる糧を海に求めた。港に適した入り江が多く船材も豊富であったため、古くから造船・操船の技術が発達し海上交通も発展していく。やがて海上

で略奪を行う者があらわれた。いわゆる「海賊」の発生である。熊野地方沿岸部の高台には「平見」と名がつく地名が多い。これは海賊襲来を見張るために設けられた見張り所があったことに由来するという。このような拠点を中心として海

域の治安を守り、航行する船の水先案内人となって航行税を徴収する集団ができる。その勢力は大きくなり、有事には守護大名に水上兵力を提供する水軍となった。

熊野別当家の確執

熊野水軍を統括したのは、熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社を擁する熊野三山の統括職である熊野別当だ。寛治4年（1090）、15代別当の長快は白河法皇の熊

野参詣への功勞として法橋位（朝廷によって認定された一番下の僧位。のちに最高位の法印位まで昇進した）を与えられ、熊野三山における政治的・財政的基盤を確立した。以後、別当家を新宮別当家・田辺別当家の二系統に分立し、新宮を中心とした奥熊野地方と田辺を中心とした口熊野地方において在地勢力を拡大していった。

野参詣への功勞として法橋位（朝廷によって認定された一番下の僧位。のちに最高位の法印位まで昇進した）を与えられ、熊野三山における政治的・財政的基盤を確立した。以後、別当家を新宮別当家・田辺別当家の二系統に分立し、新宮を中心とした奥熊野地方と田辺を中心とした口熊野地方において在地勢力を拡大していった。

勝敗を左右した熊野水軍

長快の死後、16代別当を新宮別当家の長範（長快の次男）が継承し、別当の補佐役である権別当を弟の長兼（長男）だ。田辺別当家は熊野参詣の入口である田辺地方に位置し、熊野三山の別宮としての役割を担う闘雞神社を有していたため上皇・貴族との結びつきが深く、平氏政権と親密な関係であった。一方で新宮別当家行範（長範の長男）は妻鳥居禅尼が源

快の三男）に任命する。

一方、田辺別当家の湛快

（長快の四男）は熊野本宮から勸請された新熊野社（現在の闘雞神社）を拠点に田辺

地方での在地支配を強めた。

熊野一帯での勢力を伸ばした両家だが、やがて別当・権別当の地位を巡って抗争を繰り返し、対立を強めていくようになる。



湛増と弁慶像



闘雞神社 和歌山県田辺市東陽1-1

源平合戦の最終決戦として知られる壇ノ浦の戦いで源氏を勝利に導いた熊野水軍の伝説が名前の由来となっている神社で、地元では通称「権現さん」と呼ばれ親しまれています。社伝によると允恭天皇8（419）年に熊野坐神社（現

熊野本宮大社）より勸請したのがはじまりとあります。毎年7月24日・25日には紀州三大祭りの一つ「田辺祭」が行われます。この祭りは450年余りの歴史があり、県の無形民俗文化財にも指定されています。

あ た け ぶ ね 安宅船

室町末期から江戸初期の水軍の主力となった軍船。

船体上部全体を矢倉と呼ばれる厚さ三寸(約9cm)の檜木の上に薄い鉄板を張った装甲板で覆い、楯板に設けられた狭間と呼ばれる銃眼から鉄砲や弓などで攻撃ができるようになっていた。

数十人の漕ぎ手が櫓を操ることで速力を出ないものの小回りが利き、海上の城にも例えられた。

大型のものは大安宅とも呼ばれ、最盛期には二千石積以上の規模を誇ったが、慶長14年(1609)に徳川幕府が諸大名に対し五百石積以上の大船の所有を禁じたためその歴史に幕を閉じた。

安宅船の名前は熊野水軍として活躍した安宅氏に由来するという通説をはじめ諸説あるが、確かな資料は残っておらず不明である。



氏の出身のため、六人の子らを中心に関源氏派の立場にあった。

『平家物語』によると内乱の末期、平氏・源氏の双方から援軍の要請をされた湛増は決断を迫られる。そこで熊野三山の意志を一つにするために行ったのが、新熊野社での鶏合わせの儀であった。社殿の前でそれぞれ7羽の赤鶏と白鶏を、平氏と源氏に見立てて闘わせ、どちらが勝つかで熊野権現の神意を仰ごうとしたのだ。源氏に見立てた白

鶏が勝ったことで、湛増は200艘を超える熊野水軍を率いて壇ノ浦の戦いに加わり源氏軍の勝利に貢献したと記されている。

熊野別当の衰退

湛増の死後、22代別当となった新宮別当家の行快は三山での影響力を強め、田辺別当家では湛増の遺産争いが起きる。そうした状況下で、田辺別当家の快実(かきつ)はたびたび熊野参詣に訪れていた後鳥羽上皇に接近し、その権力を

後盾に反対勢力を封じ込めようと画策する。

承久3年(1221)の承久の乱で事態は一変する。この争乱で惨敗した上皇方についた田辺別当家は滅亡し、幕府方についた新宮別当家は残ったものの、非・反別当家系の新興武士団が独自の行動を取り始めて従わなくなったため、その支配力を衰退させていく。熊野別当が統率していた熊野水軍の主流は事実上の解体状態となった。

激動の時代を経て

徳治3年(1308)には鎌倉幕府に活動を抑制されていた西国および熊野浦々の集団が一斉に反乱を起こした。争乱は約7年続き、その鎮圧に多国の兵が動員された。のちに水軍として活躍する安宅氏や小山氏はこのとき幕府によって派遣された武士団といわれている。熊野水軍は統治者を変えながら後世へと引き

継がれていった。

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで熊野水軍の武力活動は終焉を迎える。

残存勢力はあったものの、ほとんどの者が平時の収入源であった交易や漁業に力を入れるようになっていく。黒潮にのって活動範囲を広げ海外の商人と交易する者もいた。漁業では優れた操船技術を応用して組織的な捕鯨法を開発した。巨大な鯨を捕獲するのに水軍で培われた知識と技術がそのまま有効に活用されたのだ。中世における動乱の時代を経て、海民たちは元の生業へ戻っていった。

三段壁洞窟

熊野水軍の拠点の一つとして船の隠し場所だったとされる三段壁洞窟。エレベーターで地中36mまで降りた先では、日本最大級の青銅でできた辯才天像がある。当時の様子を再現した熊野水軍の番所小屋などがあり、打ち寄せる波が作り出したダイナミックな景観を鑑賞できる。

【お問い合わせ】

営業時間 8:00 ~ 17:00

※最終入場 16:50 年中無休
〒649-2211

和歌山県西牟婁郡白浜町 2927-52

TEL 0739-42-4495

FAX 0739-43-3278

御船祭 毎年10月16日

熊野速玉大社の例大祭の一つで、県の無形民俗文化財に指定されています。

大社の御神体が華やかな朱塗りの神幸船にのって熊野川を約2km上り、神の宿所とする御船島の周囲を3周して、再び大社に還る神事です。

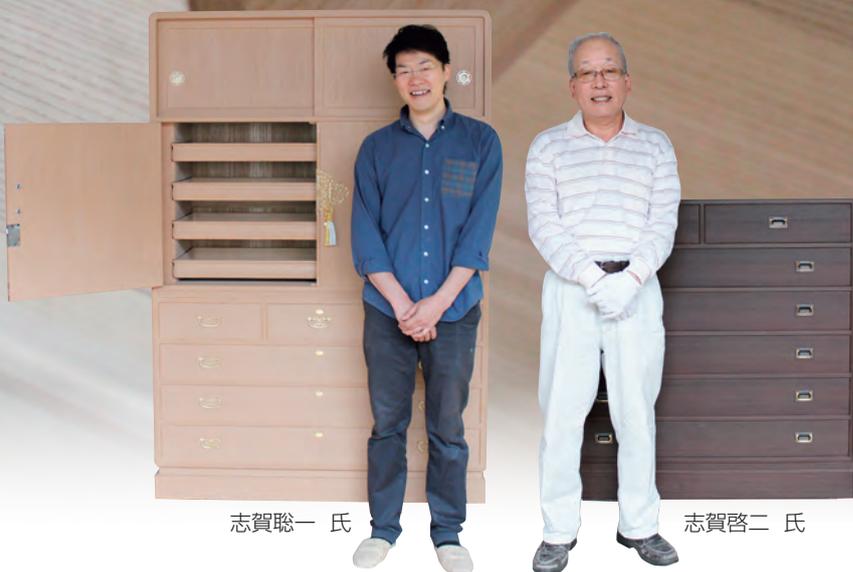
御船島の周りを9隻の早船が競漕する様子は、熊野水軍の勇姿を今に伝えています。



技術を 引き継ぐ 者たち。

— 紀州箆笥 —

日本は世界的に類をみないほど長寿企業が多く、製造技術を後世へ脈々とつなげてきた。和歌山県でも長年培われてきた伝統技術が多く、現在もその技術を次世代へ引き継ぐために奮闘している人々がいる。今号は伝統的工芸品の紀州箆笥を製造しているシガ木工さんにお話を伺った。



志賀聡一氏

志賀啓二氏

創意工夫の原点

「継続していくには、創意工夫が大切なのです」と語るのは、株式会社シガ木工現社長の志賀啓二氏だ。

志賀社長は高校を卒業してすぐに、父が営んでいたシガ木工に入社した。元々、ものづくりが好きだったこともあり、箆笥づくりの修行をしながら製造部の責任者として

日々奮闘することになる。父からは常に「創意工夫」が大切だと教えられ、それが時代とともに激変する家具業界を生き抜く経営理念となった。父が、合資会社の紀陽木工

で箆笥づくりを修行していた

大正時代に、和歌山県の家具生産量は全国で二位となり、

地場産業として家具業界は最盛期を迎えていた。当時、紀陽木工は、画期的な合板技術を生かした家具製造と製造技術の機械化を全国に先駆けて

確立させており、120名もの社員が在籍する活気のある会社だった。

昭和に入ると、戦時中には軍需工場となり弾薬箱などを作っていた。和歌山大空襲で工場が燃え、紀陽木工は残念ながら解散することになった。紀陽木工で常に「創意工夫」をすることを身につけ、シガ木工を創業した。



伝統的工芸品

紀州箆笥

伝統的工芸品として認定されている紀州箆笥には、他の認定地域にある「桐」の文字が入っていない。箆笥づくりが盛んだった和歌山県では木材の種類が豊富で、長持は桐だが、箆笥や刀箆笥は、スギ・ヒノキなどの雑木が多く使われていた。そのため、幕

末から明治にかけて書かれた川合小梅の小梅日記にも「三丁目にたんすを見に行く」と「桐」の文字が入っていないように、桐箆笥という言葉が残る文献数が少ない。

箆笥作りの起源は定かではないが、江戸時代には武家だけではなく一般の人々にも婚礼の調度品として愛されていたのは確かであり、高い品質は百年以上も伝承されてきた。長年培われてきた箆笥製造の技術は、品質、デザインともに県内外から高い評価を受けており、新潟、春日部、名古屋、泉州とともに紀州も経済産業大臣指定の伝統的工芸品に指定されている。

時代の流れと共にライフスタイルや価値観も変化し、近年では外国製の安価な商品を取り扱う大型家具店の出店も相次いでいる。

ゼットの提案を一齐に行った。そのため、箆笥を含めた大型家具の受注は全国で3割も減ることになる。



デザインなどを生み出して顧客のニーズをつかみながら新製品の開発を進めてきた。昭和62年に伝統的工芸品に認定されて以降は、桐箆笥製造に一本化することになり、ますます創意工夫を意欲的に追及することになる。

「次期社長である長男の聡一氏は、大学卒業後にシガ木工に入社し箆笥職人として技術を学んでいる。伝統工芸士になるには、最低12年の実務を経る必要があり、経験が積んだ聡一氏は近々受験予定だという。啓二氏は「今後も創意工夫をして、いろいろなものをつくってほしい。そうすれば、ものづくりのおもしろさがどんどんわかってくる。」と次期社長へのメッセージを熱く語った。

取材協力

株式会社シガ木工

〒640-8443和歌山県和歌山市延時13-4
TEL.073-452-2011
FAX.073-453-1304
<http://www.shiga-mokkou.com/>



家具業界が転機を迎えるのは、平成七年に発生した阪神大震災である。震災を機にハウスメーカーが従来の大型家具に比べ安全性が高く費用も抑えられる備え付クロー

そして 次の世代へ

時代の変化に対応するため、従来の桐箆笥にはなかった曲面加工や焼き桐加工、洋間に合うカラフルな

時代の変化に対応するため、従来の桐箆笥にはなかった曲面加工や焼き桐加工、洋間に合うカラフルな

郵便はがき

6 4 0 8 7 9 0

料金受取人払郵便

和歌山中央局
承認

2259

差出有効期限
平成30年3月
31日まで

和歌山市梶取 17-2

株式会社 ウイング
「ほうぼわかやまクイズ
&プレゼント」係



ふりがな			
お名前			
年齢	歳	性別	男 <input type="radio"/> 女 <input type="radio"/> ご職業
ご住所	〒		
電話番号			
クイズの答え	1 • 2 • 3		※あてはまるものを1つお選びください。
本誌の入手場所			

※応募くださいました個人情報は、プレゼントの発送及び弊社からのお知らせ以外には使用しません。

ダブル
W世界遺産のまち

『未来へつながる道 田辺市』へ

田辺市長 真砂 充敏



真砂市長

田辺市は、美しい海、山、川の大自然をはじめ、世界遺産に登録された「熊野古道」や「熊野本宮大社」に代表される古い歴史や文化、風土に育まれた多くの文化財が残されています。

中でも市街地にある鬮雞神社は、今号で掲載された熊野水軍ゆかりの神社で、この号がみなさまのお手元に届く頃には、世界遺産への追加登録が決定していることでしょうか。

また、世界農業遺産に認定された「みなべ・田辺の梅システム」は、養分に乏しい礫質斜面を活用して、高品質な梅を持続的に生産してき

た地域独特の農業システムで、当地域で栽培された「紀州南高梅」は、その味わいなどから梅干しの最高級品として知られています。

このほかに、日本三美人の湯で知られる「龍神温泉」や日本最古の湯といわれる「湯の峰温泉」等の温泉郷など、人々の心と身体を癒やすたくさんの観光スポットがありますので、ぜひ身近に「田辺」を感じていただきたいと思えます。



鬮雞神社

編集後記

こんにちは、ほうぼわかやま第17号をお届けいたします。発刊から9年目、年2回発行を続けてこられたのも、読者のみなさまや取材を受けてくださったみなさまのご支援・ご協力のおかげです。ありがとうございます。

さて、今回取り上げさせていただいたテーマのうち、「紀州の嫁入り」「熊野水軍」はどちらも面白いテーマで、この2つの間で特集ページの4ページのスペースを奪い合いました。結果、「紀州の嫁入り」が優勢と編集部では判断したのですが、みなさまにとっての読みごたえはいかがでしたでしょうか？

最近ではめっきり見なくなりましたが、きつと高齢な読者のみなさまにとっては、豪華な和歌山の嫁入りには懐かしい思い出が残るのではないのでしょうか？

一方、和歌山には伝統工芸品も多く、その技術が継承されています。職人の生きざまを通して、匠の技を紹介する新企画をスタートさせました。第1回目は、紀州筆筒で知られるシガ木工の志賀さん親子にご登場いただきましたが、「創意工夫」という社長の言葉に重みを感じたのは、私だけではないと思えます。

散策のページでご紹介した「真土山の万葉句碑をめぐる」は、あぜ道（道なき道？）も多いようですが、万葉の人々の旅を思い描きながら、ぜひ歩いていただきたいコースです。

そして、「熊野水軍」の本拠地に近い田辺市から真砂市長には、「I ♥ WAKAYAMA」を語っていただきました。市長のメッセージから、ダブル世界遺産のまちの魅力を再発見してくださいね。ご愛読ありがとうございます。

第17号編集長 岡 京子



株式会社ウイング印刷物を中心に販売促進のお手伝いを専門とする会社で、「ほうぼわかやま」の発行や本づくりを通じ、文字による地域文化の振興を目指しています。自費出版のご相談はウイングまで！
[沿革] 創業 1972年。設立 1981年。

「ほうぼわかやま」発行について

和歌山の歴史・文化を掘り起こし郷土愛を育む一助になればと、弊社が自費で2008年から年2回発行している情報誌です。また、この活動を通して、郷土と社内の活性化の両立を図ることを目的としています。

ほうぼわかやまのバックナンバーは弊社ホームページからもダウンロードできます。

詳しくはウェブで検索→ <http://w-i-n-g.jp> **ウイング 和歌山**

お問い合わせ先 ☎0120-136-700

協力機関 本誌を作成するにあたり、次の機関・団体にご協力をいただきました。
厚く御礼申し上げます。(順不同・敬称略)

本丸ネットワーク 田辺市 鬮雞神社 三段壁洞窟 株式会社シガ木工
橋本市シティセールス推進課 和歌山市立博物館

クイズとアンケートで 当たる!!



クイズにお答え頂いた方の中から抽選で「紀州てまりストラップ」を1つ

合計10名様にプレゼント!!

色・柄はお選びできませんので
あらかじめご了承ください。

問題

紀州藩の初代藩主・浅野幸長の娘の名前は？

- ①春姫 ②夏姫 ③秋姫

ヒント

本号のどこかに
答えが載っています

Vol.16の答えは「③紀の川」でした。

応募方法

このハガキの各項目をご記入後、切り取って投函(切手は不要です)もしくはメールにてご応募ください。 houbu@w-i-n-g.jp

2016年10月末日



本誌へのご意見・ご感想

ご協力ありがとうございました。